

筑波大学芸術系アートリソース活用に関する考察 教育普及活動を中心に

Writer

辻 真理子 TSUJI Mariko

筑波大学芸術専門学群
芸術学専攻芸術支援コース4年

人生において、最初で最後となる卒業研究をするにあたり、筑波大学芸術専門学群芸術学専攻での学習が、自分にとってどのように糧となってきたかを振り返った。そのとき思い浮かんだのは、やはり実際に体験と通じて学んだ場面であった。そこで、この度の卒業論文では、座学で学んだ「博物館学 (museumology)」と、本学芸術系におけるミュージアムとしての働きの関係を比較することとした。わたしは、日ごろから、芸術に触れない日はない、恵まれた環境にある。その環境を、せめて欲している方たちだけにでも敷衍させることができるならば、その方法とはいかなるものかを考察した。

日本の大学博物館とユニバーシティ・ミュージアム

1996年の中間報告後、第一世代とされるユニバーシティ・ミュージアムが確立し、大学が独立行政法人化した2004年から、大学が独自に展示室だけは作るなど務める第二世代のユニバーシティ・ミュージアムが作られた。そして、筆者は、大学でも予算や施設を設ける動きがないものの、その機能を果たせるよう務める、第三世代といわれ得るユニバーシティ・ミュージアムの存在があると考えた。

第三世代ミュージアムと地域博物館に習う

ユニバーシティ・ミュージアムとしての課題を、一般の第三世代ミュージアムや地域博物館の姿勢から学んだ。専門領域相互の関係性と市民相互の関係性。さら

に、1. 地域とのかかわりの中で生まれる課題に対し、ユニバーシティ内の専門領域の相互関係を図らねばならないこと。そして、2. ユニバーシティ・ミュージアムを接点として出会う市民同士の関係性を深める必要があること。である。

筑波大学の歴史に縁ある取り組み

棚橋源太郎が説いた郷土博物館論は、伊藤寿朗・加藤有次の論考により、わが国の地域博物館論の系譜として結び付けられた。そして、やはり地域博物館論に由来するリソースの活用法、教育普及活動の効果的なあり方を応用することは有意義と考えた。

また、芸術専門学群は、国立大学法人筑波大学となって以来、筑波大学芸術系の存在を内外に大いにアピールし、地域との関係の強化に取り組んできたことを窺い知ることができた。

芸術系ユニバーシティ・ミュージアムとしての、アートリソースを活用した教育普及活動の現状

本学芸術系のユニバーシティ・ミュージアムとしての組織は、アートリソースを用いた公開講座や外部への協力等を行うことにより、地域の生活に入りこみ学習を支援することによって、直接の関係性が見えない地域の生活の現実と専門領域の成果を編成し、教育内容として構造化することに努めていた。これは、地域博物館が市民の自己教育力の形成を図るときに基本とする、生活者育成型教育観を実践しているということであった。

本学芸術系のユニバーシティ・ミュージアムとしての教育普及活動のあり方
明治大学考古学博物館の黒沢浩の、公開講座を活用した自主学習化に関する論考、広島大学総合博物館の清水則雄の、キャンパス・リソースを活用した「大学の開放」の実践を研究し、本学の取り組みと比較検討をした。そして、本学芸術系の地域市民との関係の築き方、市民や学生、教員が協力して実現できる活動・プロジェクトについての方法を検討した。

アートリソースを活用した教育普及活動の可能性

大学を、「ユニバーシティ」の言葉に相応しい総合的な知を研究し、追求する場とし、「社会に開く」ためには、領域にとらわれ過ぎない総合性・包括性が必要である。本論では、本学芸術系がアートリソースを活用して、社会と繋がるチャンスを作り出し継続させようと努める取り組みを検証した。しかし、今後、より他領域・社会・地域・市民と関係を深めていける方法を考えることが求められる。



博物館学授業における作品の点数確認・点検の実践

石田徹也の作品鑑賞について

Writer

橋本 亜由美 HASHIMOTO Ayumi

筑波大学芸術専門学群
芸術学専攻芸術支援コース4年

現代日本の画家・石田徹也は、綿密な筆致で日用品と人物が合体したような特徴的なモチーフを描いた。落ち着いた色調で写実的に描写された奇妙なモチーフの数々は現代社会における静かな暴力や不条理を連想させ、見る者に不安感を与える。飛べなくなった飛行機と合体した人物、ファストフード店での人間らしさを失った食事の風景、葬儀で電化製品のように回収される遺体とそれを見守る無表情な遺族など、石田が描き出した画面から感じられる抑圧された「痛みや悲しみ」は、画面が表している現代社会に生きる人々の心をつかんだ。

死後に1本のテレビ番組で特集されたことからその作品は大きな反響を呼び、生前はほぼ無名であったにも関わらず、一部の美術ファンにとどまらない多くの一般の人々の支持を集めた。その後は作品を支持した鑑賞者たちの声に応えるかのように、多くの遺作展が開催され、新聞や雑誌でも石田の作品や生涯が紹介された。

このような動きは「石田徹也ブーム」と呼ばれ、石田徹也の作品批評などでも、石田の絵と接した人々の作品に対する熱心な支持を表す現象として触れられている。しかしながら、現在まで「石田徹也ブーム」の中では具体的にどのような出来事が起こっていたのか、ブームの中で人々はどのように石田に対する支持を形成していったのか、といった観点で調査が行われたことはない。

そこで本研究では、新聞や雑誌といった各種メディアでの石田の取り扱われ方

や遺作展の開催などについて、時系列を追って事実関係を明らかにし、いわゆる「石田徹也ブーム」とはどのような現象であったのかを追っていった。また、そのような「ブーム」の渦中であって、情熱的な支持を寄せたとされる鑑賞者たちの姿をとらえることを試みた。

2006年から2009年までの石田徹也の遺作展の会場にはノートが設置され、「寄せ書き」として訪れた鑑賞者が自由に感想・メッセージを書き込むことができるようになっていた。「この「寄せ書き」の文面を読み解くことで、鑑賞者の思いが明らかになってゆく。

福住廉は「美術手帖」2007年10月号に寄稿した「覗いているぼくを、さらに覗いているぼく 画壇アイドル論：石田徹也」の中で、当時公開されていた分の「寄せ書き」全内容を分析し、以下のような点を指摘した。

1. 石田自身に宛てたメッセージが多いこと
2. 「感動」「心」「共感」といった言葉が多用されていること

以上の2点から、福住は鑑賞者が石田徹也という人物そのものに人間的な共感を寄せていること、また、鑑賞者が石田の絵に自分を重ねる傾向があることを結論づけている。

筆者は福住の指摘に着目し、コメントの中に1,2の要素が見られることを確認した上で、鑑賞者が寄せた「共感」とは何なのか、なぜ鑑賞者は絵と自分を重ね合わせるのかを改めて分析した。

鑑賞者たちは「寄せ書き」の中で、熱心

に石田の絵の感想を語っている。「悲しみ」や「痛み」や「こわさ」など、鑑賞者はそれぞれが自分の言葉で石田の絵に描かれたものを表現した。それらの「悲しみ」や「痛み」は、鑑賞者自身が日常の中で抱く感情とつながっている。自分の「悲しみ」や「痛み」を理解している者として鑑賞者は石田に共感し、中には「救われる」という思いを抱いた鑑賞者も存在した。「悲しみ」や「痛み」といった、普段は「目を背けたい」とさえ思える切迫した感情に根ざした「共感」があったからこそ、鑑賞者は石田の作品と接することに並々ならぬ熱意を傾けることができた。様々な記事や批評で触れられてきた「石田徹也ブーム」の中には、それぞれが非常に積極的に絵との対話を行い、自分自身の感情に迫った生々しい体験として石田の作品を鑑賞する人々の姿があったのである。